

## 愛知工業大学本告教授インタビュー

Q：OR学会の現状をどの様に思われますか？

A：意識しないまでもORの手法は世の中にかなり普及してきたと思う。しかし、学会・大学と企業を橋渡しをする人材がいない。OR学会論文誌は日本語の論文が見事になくなった。企業の方はまず読まない。OR誌の方はまだ読む。事例研究を扱うようになったのは良いことと思う。

大学から企業に出向き、企業から大学の先生に相談に行く、交流しやすい環境造りが大切と思う。どの先生にどのような分野ならば相談できるかなどの情報があれば、行きやすくなる。しかし、大学の先生も最近では忙しすぎるし、それが問題だ。

Q：もう少し、現状について大学と企業の交流の観点からのご意見を伺えますか？

A：昔は一攫千金の問題がたくさんあった。たとえば、PERTが日本に入ってきたとき、中部電力の火力発電所の定期点検工事に適用した。年間何億もの経済効果があった。今も、企業に行けばそんな問題がたくさんあると思う。そのような問題を発見でき、解決できる問題把握力、問題解決力をもった人材を育成する必要があると思う。昔の企業や役所には危機感があった。今は太平ムードになってしまった。修羅場に自分から首を突っ込んで苦勞するというをしなくなった。昔は大学の先生には、「それは面白いから論文にしよう」と、真っ赤になるまで手直ししてくれた方も居られた。それが本当のレフリーだと思う。

Q：今後の学会に何を望み、何を期待されますか？

A：学会の研究発表会に企業の人を引っ張り出す努力を大学の先生にもしてほしい。実践の場では論文の前の段階が大切で、職場での問題意識を率直に発表し、企業の方から「こういう問題があるが、どのような解決方法があるか」とぶつけていくようになると、大学の先生も、それはおもしろい、というように研究に繋がるのではないかと。「橋渡しできる人材」をどのように育成するか、が課題だと思う。

Q：どの様にすれば企業の方が来られるようになるでしょうか？

A：企業の人を惹きつけるには事例研究が一番ものと言う。高尚な事例でなくても若い人が経験しそうな事例が沢山紹介されるようになって欲しい。QCがあれば普及しているのは、職工さんでも取り組むことができ、やればそれだけ自分自身のメリットがあるからである。OR学会員も会員を増やして、層を厚くしたいならば、ここにアプローチして行くことが肝要である。OR学会の企業人比率は妥当か？他の学会との比較が必要であろう。実践の科学としてのORの側面を大切にしたい。数学モデルをいじくりまわすORも大切であるが、それだけでは発展はない。

研究発表会等に企業の人に参加する場合は、自分が悩んでいる問題について「何か解決のヒントはないかしら？」、「何か役に立つ知恵はないものか？」と云う期待を持って参加していると思う。私もそうであったように……。そこで何かを得れば学会に近づくし、何も得られなければ遠ざかっていく、至極当たり前のことである。せめて上司に「こういう発表がありました。」と言って報告出来るような内容があって欲しい。

将来何かの役に立つかもしれないから聞いておこう、という人は窓際族ならいざ知らず、それほど暇な人は少ないと思う。

大学院の学生の発表が多くなってきた。それは卒業するために必要だからと思って参加する学生が大部分と思う。先生もそうだ！学生の卒業要件として参加させ、自分の職務を達成するために参加している人が大部分と思う。それは大変結構なことであり、学会としてそういう場を与えることは使命の一つであると思う。企業の場合もそうだ。参加する人にとってどういうメリットがあるか？によって参加するかしないかは決まる。

Q：21世紀に向けて学会員、学会はどのような貢献ができると思われますか？

A：問題の現場に踏み込むことが出来るならば総ての分野で貢献できると思う。特に、環境問題が深刻だ。ORがこの分野で貢献できる範囲は広いと思う。化石エネルギーも21世紀には枯渇する。オゾンホールの問題もある。開発途上国である中国やインドの公害問題もこれから出てくるであろう。地球環境の問題、温暖化の問題。このような問題は気象庁や、経済企画庁、通産省、環境庁などに働きかければ良いと思う。ORの人だけでなく、いろいろな専門家が結集して智慧を出し合って解決してゆかなければならないと思う。その中でORワーカーの果たすべき仕事は決して少なくないと思う。

インタビュアー後記：本インタビューは21世紀に向けて学会の長期計画策定のために先達にご意見を伺うことを目的としていました。活字に残すことは念頭に無かったので、インタビューしたときのメモを頼りにまとめました。活字に成ると臨場感が薄れることや、

意味するところが等身大に伝達しにくいという制約は存在しますが、舌足らずのところがありましたら、それらはすべてインタビュアーの責です。本告教授は長年企業にてORを実践してこられました。私は主に自然現象や社会現象に対する数学モデルへの興味をもち、また、大学の研究者としてのキャリアを積んできました。この私にとって学会の草創期における、企業や大学という枠を越えたある種の熱意を感じさせていただいた本告教授へのインタビューでした。そして、現場から必然的に生じる問題感覚やテーマ設定力の大切さに、ある意味で目を開かれる想いを頂きました。理論と実践、この両輪がバランス良く発展し、深められていくこと、そして、21世紀にはより社会への貢献が期待されていくことを感じさせていただきました。忌憚もてら何も無くご意見を下さいました本告教授への謝意をもって結びと致します。

(インタビュアー 穴太克則)